

第17回 優秀賞(銀の星賞)受賞作品

# 「あたりめと金平糖」

神奈川県 カリタス女子高等学校二年 小山 夏子



賢治のまちから  
全国高校生★童話大賞



優秀賞〈銀の星賞〉

『あたりめと金平糖』  
こんぺいとう

神奈川県 カリタス女子高等学校二年 小山 夏子

「救急要請！ 八戸市。年齢不詳。楠木さん。雪の重みで下腹部を骨折。ステージ3。幹線道路を一部遮断中。

先生どうします?」

「ステージ3なら打つ手あるな。八戸か。最終便、間に合うね。行きます」  
私は電話を切り、急いで革靴に道具を一つ一つ確認しながら入れた。

私の名前は、速水透。もうすぐ三十二。うちの実家は父が兄と「速水園」という造園業をやっている。

私は医者だ。でも患者は人ではない。要請があれば日本全国、時には海外にも診<sup>み</sup>に行く。家に居ることは少なく、たまに帰っても、こつやつてすぐに呼び出しがかかるのだ。青森行きの飛行機の中で、私は音楽も聴く気にならず、手帳を開く。そこには、白い桜の花びらが挟<sup>はさ</sup>んである。

私の実家には、一風変わった風習がある。この家で生まれた子は、三歳の誕生日に先代から「守護樹」を付けられるのだ。守護樹とは「守り木」ともいい、その子を一生守ってくれる「木の精霊」だという。

いかにも植木屋らしいと思う。父は杉で兄はケヤキ。そして私の守護樹は桜だ。桜は私にとってとびきり特別なものなのだ。静かに手帳を閉じると私は深く呼吸をし、目を閉じた。

僕に桜の守護樹を付けてくれた 爺<sup>じい</sup>ちゃんは、この地では有名人。商売抜きで近所の庭木を世話し、神社や学校の手入れは、無料同然の仕事をしている。見かけがちよっと怖くて人を寄せ付けない雰囲気があるのに、周りの人からなぜか人気者なんだ。

うちでは、父さんも母さんも忙しく家にいないことが多い。でも十歳の僕には、爺ちゃんがいる。引退したばかりの爺ちゃんは格好の遊び相手。誰か



らも一目置かれ、木や花のことなら何でも知っている爺ちゃんは格好良い。いつか僕も爺ちゃんみたいな職人になりたいなあ。だから僕はほとんどの時間を爺ちゃんと一緒に過ごす。

爺ちゃんと僕は、毎朝速水園の樹木畑を一時間近くかけて回診する。木の状態を観察する大切な時間だ。爺ちゃんは七つ道具を腰袋に入れて、その一式を僕に持たせる。ちよっぴり重いけど嬉しい。一本一本の木に「はい、おはようさん」と声をかけながら優しく触れる。僕は爺ちゃんの真似をしながら後を追う。

気になる木があるとすぐに診療が始まる。ループを出し木の皮を見て触り、聴診器を幹にあて木槌きじちで優しく叩きながら健康状態を確かめる。時には葉を半分に折り、葉擦すれの音を聴いたり、花の香りを嗅かいだり食べたりにする。爺ちゃんは木や花だけでなく虫や鳥など自然のことは何でも教えてくれる。それは学校の勉強と比べ物にならないくらい楽しいんだ。

学校から帰ると、爺ちゃんはいつも道具の手入れをしている。もう仕事をしていないのに、植木鋏ほのこも小刀も毎日研といでいる。そして僕が帰ってくるのを待って、仏壇のおやつと一緒に食べる。仏壇にはいつも母さんが二つお供えをする。一つはご先祖様のもので、もう一つは子供用の、妹のものだ。

そう。僕には妹がいた。でも僕はよく覚えていない。ぶくぶくした体に、真っ白な服をいつも着ていたことだけは覚えている。妹は、一歳になる前に亡くなった。時々、妹が今生きていたらなあと思ったりする。

爺ちゃんが月に一度の組合の会合の日は特別。会合は夕方から始まり、夜八時位にお開きだ。僕はいつも菩提寺ぼだいじにある桜の下で爺ちゃんを待つ。そして爺ちゃんが会合でもらってきたおつまみと僕がこっそり家から持ってきたおやつで、二人だけの二次会をする。僕の守護樹である桜。二次会にぴったりの場所だ。

木の根元を踏まないよう座っていると、爺ちゃんが遠くから現れる。そして「よう。待たせたな。透」

「爺ちゃん、今日のは何？」



そんな毎月決まったやりとりの後、爺ちゃんはニカツと笑って戦利品を出してくれる。さきいか、柿ピー、チーズ鱈に貝ひも。毎回いろいろだけど、僕が一番好きだったのは「あたりめ」だ。

ほろ酔い加減の爺ちゃんは、ライターを出すとそのあたりめを少し灸あぶる。火が入ったあたりめは、すぐに香ばしい香りを立て、身が一回り小さくなる。熱々のうちに口に頬張り、くっちゃんくちやと口の中で噛みしめるとそれは乾き物とは別物の味に変わる瞬間。爺ちゃんの一連の動作は、しびれるほど格好良いんだ。僕は二次会でしか味わえないこの「あたりめの儀式」がお気に入りだ。

その日も組合の会合の日だった。僕は夕飯を済ませた後、菩提寺の桜に行った。いつものようにうずうずして爺ちゃんを待っていると、頭にコンコンと何かがあたる。上から何か落ちてきているのかとふと顔を見上げたら、真っ暗な夜空とは対照的に白く輝く女の子と目が合った。その子は木の枝に腰掛け、足をぶらつかせている。ぎょっと驚いていると、

「よう。またせたな。とーる」

女の子はそう言うと、はっ！と小さい掛け声で僕の前に飛んできた。降りてきたのは、まだ小学一年生位の子。透けるような白い肌に、真っ白なワンピース。目が大きく黒目の部分が濃い茶色だ。そして僕が一番驚いたのは、髪。髪の毛の色が深緑なことだ。

（この子、見たことない子だな。外国人か？）

「とーる。きょうのはなに？」

「え？ え？ な、なんで僕の名前知ってるの？ 君、どこの子？ お母さんは何？」

一気に聞いてしまった。でもその子は

「うーん。さき、わかんない」

「君、さきちゃん？ 咲ちゃんっていうの？ ねえ、咲ちゃんはどっから来たの？」

「えっとねー。あっち」

というところ、その子は下を指差した。

「え？ どっこ？ 参ったなあ。こんな時間にごくにいたらお家の人心配するよ」





「いーのいーの！ さき、つよいから」

こんな感じで、何一つ噛み合わない会話がしばらく続いた。そして咲が欲しがるおやつと一緒に食べた。

その晩、僕が持ってきたのはカステラだった。

「はー。なんてきれいないろ！ おつきさまいろのおかしがあるなんて！ すてきすぎるっー」

咲は食べる前に色や形に感動し、食べては感動した。そのたびにくるくると回る目が可愛く、見ているうちに引き込まれていった。

それ以来、僕と咲は爺ちゃんの会合の晩、桜の下で会った。咲はいつも僕の持って来るおやつを楽しみにしていた。そして僕の家族や学校などの話を聞きたがる。咲は聞き上手で質問上手だった。今度こそ咲の話を聞こうと思うのだけど、会うと毎回咲のペースに振り回された。そして咲はいつも爺ちゃんが来る前に帰ってしまう。僕はこの不思議な子、咲の話を誰にもしなかった。話したらどこか消えてしまうような感じがして。

桜が満開となった満月の夜。咲に会おうとあの桜に来たけど、まだいなかった。今日は金平糖を持ってきた。色にいちいち感動する咲だから、きっと喜ぶだろうな。そんなことを考えていると、風が揺れて桜の花びらがくるくる回った。するとその花びらが鞠まりのように塊かたまりになって、木の根元に吸い寄せられていくのに僕は気づいた。それはまるで地面から強力な掃除機で吸っているみたいで、ポコッポコッと音を立てて桜の塊が根元に入っていく。胸がドクドクと高鳴った。どうしよう？ 近くに行ってみようとした瞬間。僕の身体はあっという間に根元に吸い寄せられた。

地下のさらにもっと下へ降りていく感じだった。叫んでいた気がする。気づくとそこは、違つどこかだった。知っているような知らない町。僕の住んでいる町と似た風景だった。ただ明らかに違うのは、木の根が空から生えているのだ。空が土で、地面が空。鏡に映ったように逆さまの世界だった。空から根が何本も何本も降りてるのだ。

「あれ、とーる？ どーした？ きたのか？」

目の前に咲がいた。

「さ、咲！ えっと、あの、じ、じいちゃん？」



「ここはこっちな。とーるがあっちからくるなんて、さき、おもいもしなかったなー」

咲はそう言うと、嬉しそくに案内してくれた。

僕のいる世界の下の世界だったらしい。空から生えている木の根は、太くて立派なものもあれば、ゴボウのように細くて栄養が足りていないものもあった。木が大きければ大きいほど、根もこんなに太くて横に下に元気良く張っているというのを初めて見た。木だけでない。植物の根も一緒だった。天が土だから、全体的に暗くこっちはモノトーンに感じた。逆にどこまでも広く青い空が、足元に広がっているのも不思議だった。咲の世界では、天と地が僕の世界と逆なのだ。

「とーる。おやつたべるか?」

咲はそう言うと自慢げに僕に差し出した。でもそれはどう見ても泥の塊だった。

「いらねーよ。こんなの、食べられないし」

「はあ? とーるはしかたないやつだなー」

咲は泥土の塊を美味しそくに頬張っている。あまりにも強く勧めるので一口食べると、それはケーキみたいだった。さらさらとした舌触りの上に広がる芳醇な土は、チョコレートとコーヒーを足したような味

がした。一緒に味わった樹液のシロップジュースの方は、いつも爺ちゃんと舐めている木皮を砂糖漬けたような甘い味がした。僕が咲のおやつを食べている間、咲は嬉しそくに僕を見ていた。

「そうだ。咲におみやげあるよ。はい」

と言ってポケットから金平糖を差し出した。

「わあ! なにこれ? おほしさまか? こんなきれーなおかしみたことない! きれーすぎるー!」

咲が絶対に喜ぶと思っていただけに、思わずガッツポーズをした。と同時に、あまりにも体を反らしすぎて体勢を崩し、後ろに倒れそうになった。でもそのまま僕は倒れることなく、木の根元に吸い寄せられていった。

「さきね。つぎのおやつ、あれがいいなー」

咲が一生懸命語りかけていたけど、僕は上へ上へ吸い寄せられていった。咲の声が遠のき、僕は気づくと桜の根元に戻っていた。



この日以来、僕は咲と会えていない。今日こそと思い何度も菩提寺の桜に足を運んだ。けど咲は現れない。ぽっかりと胸に穴が空いた感じがした。いつしか僕は金平糖を一粒、桜の根元、あっち世界の入口に置くようになった。僕は考えた。咲が言う「こっちの世界」は何だろう？ 木の根が空から生えていたから土の中の世界？

裏の世界？ でも咲にすれば向こうがこっちの世界だから、ここが裏か？ 咲は一体何者だろう？ 次食べたいおやつ？ 考えれば考えるほどますますわからなくなった。

でも爺ちゃんと一緒にいて、気づいたことがある。爺ちゃんは木を診る時、木だけでなく葉や虫、土まで全て見ていたことを。この世はここだけではないのだろうな。咲がいた世界も僕の世界もまたこの世なのかもしれない。

そして咲に最後に会った日から三年が経ち、僕は中学生になった。爺ちゃんに正式に弟子入りし、学校以外の時間で木の剪定せんていや手入れなどの本格指導を受ける日々を送っていた。毎日咲の桜に金平糖を添えるのは、もう習慣じょうぐわんになっていた。次の朝には、置いた一粒はなくなっていたから、咲がこっそり現れて食べているのかなと思ったりした。

その夜は、けたたましい火の見やぐらの鐘の音で目が覚めた。布団から飛び起きると

「まずい。菩提寺さんの方じゃ」  
と爺ちゃんが厳しい顔で言った。裸足はだしで庭に出ると寺の方の空が夕焼けのように真っ赤だった。嫌な汗が背中を流れる。消防団に所属する父さんと兄さんが、団服に着替えてた。

「透！ いけん！ お前はここにいろっ！」  
父さんが言うのも聞かずに、僕は着の身着のまま寺に向かって走り出した。咲が、咲の桜が！ あっち世界の入口が……。

寺に近づくとつれ、火の勢いが増し熱風がさらに強くなっていた。嫌な予感が当たってしまった。火の粉がちりちりと降りかかり、白かった煙が段々黄色に変わってきていた。



「ぎゃ——！！ あつい！！ いたい！！」  
ドキリとした。聞き覚えのある声だった。

「たすけてえ！ たすけてえええ！」

咲だ。無我夢中で桜に飛びつきよじ登った。

「あつい！！ あつい！！ たすけてとーるー！」

咲の声は上に登るほど大きくなっていった。

「咲待ってる！ どころ？？」

煙は黒くなり、もう何も見えなくなっていた。本堂の火が回り、周囲の木々を狂ったように燃やし続けていた。僕はゲホゲホと咳せきをしながら、咲の声の方を懸命に探した。

そして多分、頂上に近い枝が横に伸びている場所で、僕は腰掛けた。目ももう開けられなかった。息をするのも苦しくて頭が痛かった。

「透！！ 手を広げろっ！ 受け取れ——！」

兄さんの声だった。言われるがまま広げた手にバシツと何かが投げ収められた。必死に目を開けると、それは爺ちゃんの小刀だった。

「透！ 新芽じゃ。新芽を切れいい！」

爺ちゃんの通る声が煙の下からはつきり聞こえた。そこから僕はさらに上に上に低い姿勢のままよじ登り、新芽を探した。

「とーるう……とーるう……」

咲の苦しそうな声がさらに大きくなった。開けない目を思いつきり開くと、そこには幹からしっかりと育った新芽の枝があった。

大きく深呼吸をした。そして爺ちゃんの短刀で枝のできるだけ根元を、下から上に向けて振り切った。

その瞬間、咲の声が途絶えた。僕は咄とっさ嗟に枝の切り口を口に啣くわえた。すぐにそこから下に降りようとした。けど、火と煙の勢いがさらに強くなり、どこにも動くことができない。熱くて苦しくてもうだめだ。

「透！ こっちだ！ なるべく遠くへ飛べえ！」

父さんだった。僕は桜の木の頂上から新芽を啣えたまま、空に向かい思いつきり飛んだ。





私は生きていた。木の下でマットを広げた父と兄が私を確実に受け止めてくれた。不思議なことに、喉のどを痛め髪の毛と鼻毛が焦こげた以外私は無傷だった。「桜の精霊が透を守ってくれた」と皆が口々に言った。「どうしてあんなことしたの?」とも聞かれたが、誰にも答える気にならなかった。

火事にあつた桜は、全身火傷のステージ4で瀕死ひんし状態だった。根さえ生きていればと、速水園の職人達が総出で、丁寧に土を掘り起こしてみたが手の施しようがなかった。寺で桜の葬式が行われ、住職がお経をあげた。

悔しくてボロボロ泣いた。私の守護樹がなくなったということより、咲と、咲の世界と繋がっていた入口が閉ざされたことが。

私が口くちに啞おえた新芽は、祖父が切り口からバイ菌が入らないようすぐに応急処置を施し、冷暗所に厳重に保管していた。

梅雨つゆが明け、蝉の声が聞こえ始めたある日。

「透。桜は他のどの木よりも難しい。手間ばかりかかる。その割に結果がすぐに出ん。お前、やれるか? 守り続ける覚悟、あるか?」

祖父が静かに聞いた。もちろん私に迷いはなかった。咲にもう一度会いたかった。

そこから祖父と私は、新芽に接ぎ木をする手術に挑んだ。咲の桜は接ぎ木をするのに向いている品種ではなく、祖父でも経験がなかった。難易度が高く新芽もこれ一本しかないため、失敗したらそこで終わりだった。

新芽を育てるための台木に切り込みを入れ、新芽を慎重に差し込んだ。藁で新芽と台木がずれないように優しくもしっかり巻いた。どの工程も丁寧に心を込めてやった。花が咲くかどうかは今から二十年後だと祖父は言った。接ぎ木をしてしばらくは暑さで枯れないように注意した。

朝の回診も寒さで震える頃になると、桜が風邪を引かないように、根元に藁を丁寧に重ねた。夏から秋に蓄えた木は、冬の間成長を止める。接ぎ木したばかりの咲の桜が冬を乗り越えられるかが正念場だった。

冬の寒さが和らぎ、春の鳥が訪れる季節になると、他の木たちはつぼみをたくさんつけた。でも咲の桜は何も様子が変わらなかった。見かけには何も



変わってなかった。生きているのか枯れているのかも私にはわからなかった。

「構かまい過ぎるのも駄目かまじゃ。目を離かましちゃいけないがやりすぎるな。子育てと一緒にじゃ」

と静かに見守るよう祖父は私に言った。

五年が経ち、木の幹が太くなった。でも病気と虫に何度もやられた。その度に祖父が薬を患部に注射した。炭や木酢液などをその都度の症状に合わせて絶妙に配合した。

桜は容態が落ちつくくと、高さが私の身長をゆうに超えた。今後の成長速度を考え、速水園から町が一望できる高台へ植え替えをした。機敏に指示を出す祖父の一つ一つの仕事を、私は手伝い教わりながら、研修医としての現場技術を上げていった。

咲の桜を接いだから八回目の春が来た。私は二十歳になり、樹木医になった。他の桜たちが満開だった。

祖父は床に伏せ、もう私と一緒に回診をすることができなくなっていた。

「また一年が始まるな。透」

一年のうち、桜の満開はたったの五日間。残りの三百六十日を辛抱強く、できる限りの手間と愛情をかけて、祖父と一緒に桜を守ってきた。そしていつも満開の桜が散り新芽が出てからが、私達の一年の始まりだった。祖父はその始まりの日に、静かに旅立った。

私は一人になっても、毎朝回診し、木の声を聞き、周りの鳥や虫、土や光に気を配った。あっちの世界で木の根を目の当りにしたせいか、私は特に根と土の状態には神経を注いだ。祖父のように、土を口に含むものにも慣れた。あの時の味が忘れられなかった。あんな極上な土は、こっちでは味わうことはなかった。

接ぎ木をしてから二十年が経った。その年、咲の桜が少し咲いたと母からメールと画像が送られて来た。私は政府の要請で、国際救命救急樹木医とし



てジャカルタの森林火災へ派遣されていた。画像で見た桜は、枝の所々に白色の小さな花を確かに咲かせていた。

そして次の年。あの晩と同じ満月の夜、私は会いに行った。町の高台に向け一歩一歩近づくと、月光に照らされた桜が待っていた。幾重にも花びらを重ねた白く愛らしい花が、無数に咲き誇っていた。ため息が出るくらい気品のある姿だった。凜とした花々が、私の方を向いて微笑ほほえんでいる気がした。

木の真下まで来て、幹に手と額を重ねると、懐かしい匂いと温かい体温を感じた。

「よう。またせたな、とーる」

祖父の口癖を真似した懐かしい声がした。

私の目の前に現れたのは、大学生位の美しい娘だった。月夜に照らされた肌とワンピースは一層白く、くるくる回る瞳は濃茶で、なびいた長い髪が深緑に輝いていた。

「きょうのはなに？」

鼻の奥が熱くなり、視界がぼやけてきた。

「あたりめと金平糖。さあ、あたりめの儀式を始めよう」

はち切れんばかりの最高の笑顔があった。

「はい、楠木さん。それでももう大丈夫。よく頑張ったね。定期的に雪下ろししてもらってね。そうそう、

これお守り」

私は楠の木の根元に、そっと金平糖を置いた。